

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

⑤他分野の大学院生との共同研究の実施

《理工農系》

●大阪大学理学研究科数学専攻

「数物から社会に発信・発進する人材の育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

数物コアセミナーの名称の下で、数学を専攻する学生と物理学を専攻とする学生を混合したグループでのセミナーを行った。RAの学生をまとめ役として実施したが、専門を異にする学生とのコミュニケーションは難しく、セミナーの内容が中途半端なものになりがちで、実施後の学生アンケートの結果も芳しくなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

専門を異にする人に自分の研究内容を伝えようとするとき、議論をするに値する深い内容に達するのは難しい。これは成熟した研究者でもそうなのであるから、学生ならばなおさらである。これを無理に行うと、内実の伴わないものになってしまう危険性がある。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

1年目の結果を基に、2年目は同じ形態で実施するのは中止した。専門が異なるものの共同のセミナーを内実を持たせるためには、学問間の理解がより深まった状態で始めるべきで、学生のレベルでするのは無謀と判断した。これは大学院教育改革よりもより研究の最先端で行うべきことと考える。